

秋田という風土で生きる誇り

秋田経済研究所

理事長 新谷 明弘

先日、潟上市にあるギャラリー・ブルーホールで開催されている「永沢碧衣展 記憶の堆積」を鑑賞してきました。永沢碧衣さんは、秋田公立美術大学を卒業後、2023年に若手作家の登竜門とされるVOCA展でグランプリを受賞された活躍のめざましい絵画作家です。秋田に暮らし、狩猟者の視点から命の継承をテーマとする独自の世界観を描き続けておられます。

作品展の会場で最初に出会う「淵の声」という作品は、狩猟者でもある永沢さんが初めて対峙し、仕留めたイノシシの姿が描かれています。仕留めたイノシシの生と死を跨ぐ姿が、その自然からの授かり物の邂逅を残す形で血液からは絵具を、皮からは膠を作り、描かれています。これまで永沢さんの作品を何度か鑑賞する機会がありましたが、作品の前に立つと、子供の頃の原体験や原風景が蘇る感覚を覚えます。その感覚はどこか懐かしく、また畏怖心をとともなう記憶となって蘇ってきます。

一昨年秋に開催された「長活き学校 秋の学校祭」において、秋田公立美術大学の石倉敏明教授（講演時は准教授）による「季節の時間と地域の祭り」と題する講演がありました。石倉教授は、秋田に移り住んでから、この秋田は「私たちが感じる季節の変化とそこで培われてきた生活文化が、同じ環境に人間とともに生きているさまざまな動植物や微生物の存在を強烈に意識させてくれる。秋田という風土は、共に季節的な存在である人間と人間ならざるものの関係を見直すきっかけを与えてくれる土地である。」と話され、秋田には「帰ってきた感覚」があり、未来に帰るべき場所、現在帰ることのできる場所を守り、継承していくことの大切さを教えてくれる独特のものと説明されています。

講演を聴き終え、秋田には季節の移ろいとともにも培われた祭りや行事、多彩な食文化があり、また自然からの恵みを神さまからの授かりものとして祀る風習など、改めて継承されていくべきものが数多く残されていると実感させられました。永沢さんは、作品をVOCA展へ推薦された石倉教授をはじめ多くの指導者と出会い、この秋田で互いに季節的な存在であり、神からの授かりものでもある動植物と対峙し、心身に残された記憶を作品として表現する道を選択されたものと想像しています。

秋田にはなかなか言語化しがたい、本当に多彩な価値が存在していると感じます。その価値をうまく言語化できないことにもどかしさを覚えるとともに、この長年培われてきた風土や文化を継承し、誇りをもって暮らしていきたいとも思っています。

石倉教授の講演の後、参加されていた会場の女性が手を挙げ、ゆっくりと語りはじめました。「私は長年農家として、すばらしい自然の豊かさを感じながら好きな農業をやってきました。今年で75歳となり、周囲からは『もうやめたら』と言われ迷っていたけれども、今日自然は神さまそのもので、自分が育ててきた作物は神さまからの恵みであると聞いて、本当に心強い気持ちになりました。改めて最後まで自然とともに生きていこうという思いを強くしました。」というものでした。胸を打つ「秋田という風土で生きる誇り」を感じる言葉でした。